

書 評

岡本正明. 『暴力と適応の政治学—インドネシア民主化と地方政治の安定』 京都大学学術出版会, 2015 年, 304 p.

森下明子*

本書は、多民族国家インドネシアにおいてなぜ 1998 年に始まる民主化がうまく定着し、政治的安定が実現したのかを、政治学および地域研究的視点から探るものである。本書の定義によると、政治的安定とは「イデオロギー・宗教・エスニシティ・階級・地域間格差など社会的亀裂に基づく対立が物理的暴力の行使に発展せず、政治体制が安定していること」(p. 6) を指す。本書はこの政治的安定のメカニズムを西ジャワのバンテン地方の事例から分析し、インドネシア全体にも一般化する政治学的知見を提供している。また本書は地域研究としても魅力に溢れる内容であるが、その分析枠組が十分に明示されていない点が惜まれる。

一般に、多民族国家における民主化は社会的亀裂をさらに深め、暴力を伴う紛争を引き起こす可能性を高めるという議論がある [Snyder 2000; Collier 2010]。インドネシアでも民主化前後の 1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて、都市部では反華人暴動、マルク、カリマンタン、スラウェシのボソでは住民間の暴力的な紛争が生じた。しかし 2000 年代後半以降は、そうした暴力的な社

会混乱や紛争が起きなくなり、今日では政治的安定が実現している。

このインドネシアの政治的安定のメカニズムを探るために、これまでのインドネシア政治研究では、主に国政や国軍に焦点を当てた分析が行われてきた。たとえば、著者によると、国政の分析からは中央政界の政治エリート間の合意形成や政党の中道化が指摘され、国軍の分析からは国軍改革による国軍の脱政治化とその結果として国軍による紛争への党派的介入の解消が指摘されている (p. 8)。しかし、地方レベルでは社会的亀裂などの紛争を引き起こしうる要因がいまもある。そこで本書が目指すのが、地方政治の分析である。

本書の具体的な問いは以下である。インドネシアでは民主化と地方分権化によって地方の政治経済的資源が拡大し、それにより、「どの地域でも地方エリート間で資源争奪戦が起きた。そのエリート間の対立が社会的亀裂に沿った動員を伴えば、対立は深刻化、暴力化する可能性が高まったが、実際にはそうはならなかった。なぜであろうか」(p. 9)。

本書はこの問いに対して、政治学的視点から以下の 2 つの説明を行なう。ひとつは、自治体の細分化である。地方分権化後のインドネシアでは自治体内の少数派グループなどが自治体新設運動を展開し、自治体数が急増した。その結果、「社会的亀裂に沿った政治的対立軸が減少して自治体内の同質性が高まり、その結果として地方政治の安定につながった」(p. 9)。

もうひとつは、総選挙と地方首長選挙にお

* 京都大学学術研究支援室

ける社会的亀裂の非政治化である。インドネシアの総選挙は5年に一度、国会議員選挙と地方議会議員選挙が同日開催で行なわれる。民主化後の総選挙では20以上の政党が参加し、また、1999年と2004年の総選挙では比例代表制が採用されたことから、主な争点は国政レベルの課題となった。他方、公選制で行なわれる地方首長選挙では、ペアで出馬する正副首長候補が異なる社会的亀裂の代表者の組み合わせであったり、同じ社会的亀裂の代表者の組み合わせが複数乱立したりする状況がみられた。そのため、宗教やエスニシティなどの社会的亀裂が争点化することはほとんどなかった (pp. 9-10)。

本書はこの2つの説明を実証するために、西ジャワのバンテン地方の事例を取り上げる。バンテンに注目する理由は6つ挙げられているが (p. 11)、おそらく最も重要な理由は、バンテンではエスニック・アイデンティティに依拠した暴力集団が政治的影響力をもっている、という点であろう。著者はバンテンでの長期にわたるフィールド調査を通して、暴力を政治的資源とする集団が紛争という手段を使用することなく政治的権力を獲得・維持・拡大する過程を、果敢にもごく間近からつぶさに観察し、その様子を彼らの人となりや政治的生き様も含めて丹念に鋭く描く。ここに地域研究としての本書の魅力がある。

本書は、こうした政治学的かつ地域研究的なアプローチに基づき、以下の構成にみるように、バンテンの政治分析に主眼をおいている。

序章 暴力集団の台頭と「地方政治の安

定」—社会的亀裂はなぜ政治化しなくなったのか

- 第1章 権威主義体制の崩壊から民主化・分権化へ
- 第2章 暴力集団（ジャワラ）とイスラームバンテン地方の政治構造の歴史的展開
- 第3章 独立宣言，社会革命，そしてアイデンティティの政治—1945-1971年
- 第4章 ウラマーとジャワラを通じたスハルト体制の浸透—1971-1998年
- 第5章 細分化の地域主義—バンテン州設立運動
- 第6章 州「総督」と呼ばれる男—権力闘争とジャワラによる地方支配—2000-2006年
- 第7章 新勢力との闘争—バンテン州知事選，2006年
- 第8章 福祉正義党—イスラーム的正義の台頭と皮肉なアクロバット
- 第9章 安定化のポリティクス—多様性—インドネシア地方政治の全体像
- 第10章 暴力と適応の政治を超えて

第1章ではインドネシアの民主化改革の概要が示され、地方分権化政策の詳細とその後の自治体新設運動の全国的展開が精密かつ簡潔に述べられている。第2章から第8章まではバンテン地方の政治の実態が時系列で描かれ、特にジャワラ (jawara) と呼ばれるバンテンの剣術・呪術に長けた男たちの集団とそのリーダーであるハサン・ソヒブに焦点

が当てられている。そして第9章では、バンテン以外の地方の事例が取り上げられ、本書が提示する政治的安定に関する説明がインドネシア全体に当てはまることが示されている。さいごに第10章ではフィリピンとタイの政治との比較を通して、今後のインドネシア政治の行方が論じられている。

本書がこれまでのインドネシアの政治的安定に関する議論に、自治体の細分化と選挙における社会的亀裂の非争点化という新たな視点を提供した意義は大きい。これらの指摘は国政や国軍の分析からはみえてこなかった点であり、地方レベルの分析によって初めて明らかになったものである。また、これらは第9章で示されるようにバンテンにのみ当てはまる要因ではなく、インドネシア各地の政治的安定を説明する際にも有効である。

しかし、本書の分析がインドネシア全体に有効であるがゆえに、本書の醍醐味ともいえる暴力集団に関する詳細な記述の意義が、以下の2点において不明瞭になっている。ひとつは暴力集団の分析的位置づけである。自治体の細分化と選挙における社会的亀裂の非争点化は、バンテンのように広範囲の社会・経済・政治的影響力をもつ暴力集団が存在しない地方においても当てはまる。それゆえに、本書が暴力集団に注目する必要性がどの程度あったのか、疑問が残る。

また、暴力集団と紛争の関係性についても不明瞭である。バンテンの暴力集団は、そもそも紛争の発生に寄与する大きな要因となりうるアクターだったのだろうか。たとえば2000年代初めに起きた中カリマンタン州の

住民紛争では、ダヤック人のNGOグループがマドゥラ人移民の暴力的排斥を主導したが、このとき地元で社会・経済・政治的影響力をもっていた暴力集団は紛争に直接関与しなかった[森下2015]。この紛争の首謀者たちは、紛争を手段として、これまで手に入らなかった政治的影響力を得ようとした人々であり、バンテンの暴力集団のようにその時々体制にうまく取り入りながら政治経済的成功を手にした人々ではなかった。バンテンの暴力集団のような、いわば地方の「勝ち組」がわざわざ紛争を引き起こす必要はあるのだろうか。

しかし地域研究的な視点から見ると、バンテンの暴力集団の実態に迫ることには大きな意義がある。著者はその意義をあとがきのなかで半ば謙遜気味に以下のように述べている。「本書はインドネシア政治を扱う地域研究の書物であり(中略)ある分析枠組みでシャープにインドネシア政治に切り込むというより、民主化・地方分権化時代のインドネシア人たちの人となり、政治的生き様を鮮烈に描くことを重視するものとなっている」(p.269)。さらに踏み込んでいえば、評者の理解では、本書は地方政治アクターの生き様の描写を通して、インドネシアの政治的安定のメカニズムをバンテン地方の文脈、さらにいえばインドネシアの暴力集団の行動原理からも説明しようとするものである。

しかし、残念ながら本書では政治学的分析による説明が示されている一方で、地域研究的視点に基づいた説明は明示されていない。その代わりに、本書はバンテンの暴力集団に

関する一次資料のような詳細な情報と人物描写を提供している。まるで読者にさまざまな切り口から地域的文脈をみつける楽しみを敢えて委ねているようにもみえる。しかし、もし著者が地域研究的視点からもさらに踏み込んだ分析を示してくれていれば、本書はインドネシアの政治的安定のメカニズムに関する地域的文脈をも明らかにするものとなり、さらには政治学と地域研究の双方のアプローチを接合しうる画期的な分析枠組を提示するものになったであろう。

引用文献

- Collier, P. 2010. *Wars, Guns, and Votes: Democracy in Dangerous Places*. New York: Harper Perennial.
- Snyder, J. 2000. *From Voting to Violence: Democratization and Nationalist Conflict*. New York: W.W. Norton.
- 森下明子. 2015. 『天然資源をめぐる政治と暴力—現代インドネシアの地方政治』地域研究叢書 29. 京都大学学術出版会.

水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編。
『アジア経済史研究入門』名古屋大学出版会、2015年、390 p.

谷口謙次*

近年、アジア研究において歴史研究、特に経済史研究への関心は低下している。他方で、地域研究や人類学、あるいは現状分析への関心はますます高まっている。これはここ

30年余りのアジア諸地域の経済発展、それに伴う政治的・社会的変動が背景にあるのだろう。だが、実際に地域研究や現状分析などの書籍を手にとると、その多くで諸問題への歴史的・経済史的背景に多くの紙面が割かれている。つまり、アジア研究において歴史学や経済史に関する潜在的な需要は決して低下していない。むしろ高まっているのではないかと筆者は感じている。

そうした中、新たに水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編『アジア経済史研究入門』が出版された。これまでアジア史に関する研究入門としては、島田虔次ほか編『アジア歴史研究入門』と桃木至朗編『海域アジア史研究入門』がある。『アジア歴史研究入門』は総索引・総目次を含む全6巻と大作であり、現在も有用な情報を数多く含んでいる。しかし、出版からすでに30年が経ち、新たな研究や資料が多数出されている。『海域アジア史研究入門』はコンセプトが本書と非常に近いが、時期が9世紀から19世紀初頭と限定されており、分野も経済史のみならず、文化史、宗教史、外交史と幅広い。対象領域も東アジア・東南アジアが中心で南アジア・西アジアはほとんど触れられていない。アジア全体をカバーし、古代から現代までと幅広い時代について論じられている本書は、アジア経済史を学ぼうと格好の良書である。

まず、本書の構成をみることにしよう。本書は「序章」から始まり、「第I部 東アジア」、「第II部 南アジア」、「第III部 東南アジア」、「第IV部 西アジア・中央アジア」の4部からなる。第I部は中国について論じ、

* 大阪市立大学大学院経済学研究科

第1章、第2章が前近代、第3章、第4章が近現代となっている。第5章は朝鮮について古代から現代までを解説している。第Ⅱ部はインドを中心に論じ、第6章、第7章が前近代、第8章、第9章が近現代となっている。第Ⅲ部は第10章が前近代、第11章、第12章が近現代となっている。第Ⅳ部は西アジアを中心に論じ、第13章、第14章が古代、第15章が前近代、第16章が近現代となっている。第17章は中央アジアの近現代について解説している。

各章は大きく3つのテーマ、生産（農業・工業）、流通（商業・貿易・市場・貨幣・金融）、国家（財政、税制、政策）について概観している。ただ、第Ⅰ部と第Ⅱ部は大半が中国とインドの1国のみを扱っているため、テーマごとに論じやすいが、第Ⅲ部と第Ⅳ部は複数の国や地域を扱っているため、章の中にはテーマすべてを触れていないところも存在している（第5章も同様である）。

末尾には、文献一覧と付録がついている。文献一覧は章別で、日本語のものと英語のものが分けて掲載されており、非常に詳細で読者にとって利用価値が高いものである。付録は研究支援情報と共通項目索引に分かれている。研究支援情報は地域ごとに1) 先行研究を調べるには、2) 原資料を発掘・収集するには、3) 工具類、の3項目に分かれ、専門HPやアーカイブ・データベース、国内外の研究雑誌や図書館・研究所、事典や地図などのデータが詳細に記載されており、初学者だけでなく研究者にとっても極めて有用である。共通項目索引は重要な用語に関して地域

横断的に調べることが可能で、読者の関心を広げるのに役立つ。

次に、本書の特徴を挙げることにしよう。第一に、序章でグローバル・ヒストリーの重要性が示されたことである。グローバル・ヒストリーは「比較と関係」を重視するが、もちろん従来の研究でもこうした視点は存在した。しかし、その多くは産業革命期の西欧（特にイギリス）を基準とする類型論もしくは発展段階論であり、アジアの「後進性」が前提とされてきた。また、一国史観が前提とされて多国間にまたがる貿易や商人活動、移民などは重視されてこなかった。

グローバル・ヒストリーは歴史統計の整備や生活水準に関する指標の研究によって国際比較を可能とし、欧米とアジア、あるいはアジア同士を同じ基準によって比較検討するようになった。その結果、アジアは後進的な地域とは看做されなくなってきた。また、地域論やネットワーク理論、環境学などを援用してそれまでの一国史観を脱して、広域地域の特徴や有機的連関を描き出した。アジアは多様な環境や文化によって経済発展が多経路にわたり、複数の地域経済圏が重なり合っていた。経済圏は貿易や企業活動、労働力移動によって相互に結びつき、発展していたことが明らかになってきた。グローバル・ヒストリーはとりわけアジア経済史に多数の論点を提供し、研究の発展を促したといえる。

第二に、ほとんどの地域で現代史が大きく取り上げられたことである。従来、歴史学者は直近30年～40年の現代史を取り扱おうとしなかった。新資料の発表・発見の可能性が

高いこと、当時の政策や事件、関係者などの評価が依然定まっていないことなどが理由として挙げられていた。『アジア歴史研究入門』においても中国・朝鮮で現代について触れているが、政治史が中心である点、マルクス史観の影響で経済発展に批判的である点などいくつかの課題が存在した。しかし、アジアにおける近年の経済発展は経済史に大きな論点を提供している。つまり、現在の経済発展に至る歴史的経緯や社会経済的背景を考察することである。だが、現在の社会経済の状況が明らかでなければ、こうした論点は明確にならないであろう。この点で現代史は重要な意味をもつようになった。現代史研究は限られているため、本書では現状分析の研究が数多く取り上げられているが、同様に本書が示した東アジアや東南アジアにおける 20 世紀前半の研究では、当時の研究や報告書が現在の歴史研究で重要な役割を果たしてきた。現状分析の研究も今後同様の役割を果たすことになるだろう。

最後に、議論の余地がある点を指摘しよう。第一に、モンゴル帝国を扱う章がなかった点である。第 1 章では中国に関係する点のみ扱われているが、他の章ではほとんど言及されていない。しかし、ユーラシア全体を支配した帝国では地域を越えた経済問題が指摘されている。たとえば、愛宕松男は元朝の銀不足について、当時同様に銀不足であったイル＝ハン国へ銀が流出したためと論じた。だが、杉山正明は逆に、イル＝ハン国から元朝に銀が流出したのであり、元の銀需要の高まりがイル＝ハン国の銀不足を招いたとし

た。この問題は単にモンゴル帝国だけでなく、16 世紀以降の「銀の時代」の要因と関係しており、触れられるべき論点だと考える [愛宕 1973a, 1973b; 杉山・北川 1997: 169-173]。

第二に、地域横断的論点の取り扱いについてである。一点目は、ポメラントの「大分岐」論である。イングランドと中国の詳細な比較研究であり、第 1 章でアジア諸地域において近世・近代の経済発展論に新たな論点を提示したと指摘され、南アジアの近世を扱う第 7 章、西アジアの近世を論じた第 15 章第 3 節でリプライとなる研究が示されている (p. 4, p. 111, pp. 220-221)。だが、中国明清期を取り扱う第 2 章では全く触れられていない。近代を扱う第 3 章では触れられているが (p. 53)、やはり第 2 章でもポメラントの議論を位置付け、問題点を指摘することが他地域の議論の位置付けにもつながると筆者は考える。

二点目は、家島の「イスラム海上交易ネットワーク」論である。10 世紀以降の海上交易ネットワークの変化は西アジアを越えて、中央ユーラシア・北アフリカ・南アジアに大きな影響を与えたと、第 6 章では指摘されている (p. 102)。しかし、第 15 章では研究が紹介されるに止まっている (p. 213)。ポメラントの議論と同様、西アジアにおいて海上ネットワークが果たした役割を明確に論じることは他地域での評価も明確にするものであり、必要であろう。

第三に、周辺・辺境の取り上げ方である。経済史は経済発展の歴史を重視するため、先

進地域を重視し、辺境地域を軽視する嫌いがある。だが、ネパールやチベットなどの山間部やスリランカや香港などの島嶼部は中継貿易の要所であり、かつ貴重な特産品生産地であった。そのうえ、大国を結びつける地域としての役割も果たしてきた。こうした辺境地域の役割を示すことも重要であろう。また、第Ⅰ部と第Ⅱ部では中国・インドの研究が主に取り上げられていたが、実際にはパキスタン・バングラデシュ・台湾など旧植民地や第二次世界大戦後の分裂によって生まれた複数の国家や地域を含んでいる。これらは近年、中国（中華人民共和国）やインドと異なる経済発展や社会構造の特徴を示している。前述のように現代史の重要性が増している中、これらの国家・地域をどのように描くのかも重要な課題であろう。

いくつか議論の余地がある点を指摘したが、本書はアジア史やアジア経済史を志す初学者だけでなく、アジア研究に携わる方々にも有用であろう。それは単に関連する研究や資料だけに止まらず、これまで関心を払わなかった地域や時代、研究課題を見出しうることである。アジア地域に関心をもたれる方々にはぜひ手に取られることを薦める一冊である。

引用文献

- 愛宕松男. 1973a. 「幹脱銭とその背景（上）—13世紀モンゴル=元朝における銀の動向」『東洋史研究』32(1): 1-27.
 ————. 1973b. 「幹脱銭とその背景（下）—13世紀モンゴル=元朝における銀の動向」『東洋史研究』32(2): 163-201.
 杉山正明・北川誠一. 1997. 『大モンゴルの時代（世界の歴史9）』中央公論社.

石井米雄著. 飯島明子解説. 『もうひとつの「王様と私」』めこん, 2015年, 224p.

櫻田智恵*

はじめに

本書が発行された5ヵ月後の2015年の6月、演劇界最高ともいわれるトニー賞のミュージカル部門リバイバル作品賞に『王様と私』が輝いた。受賞はならなかったものの、渡辺謙がミュージカル主演男優部門に日本人で初めてノミネートされたことから、日本のメディアでも積極的に取り上げられ、これをきっかけに『王様と私』は、日本でも再び注目を集めることとなった。

この作品は19世紀のシャム（現タイ王国）を舞台にした「王様」とイギリス人女性家庭教師の「私」との交流を描く「歴史を背景としたロマンス」であり、実は当時のシャムについての誤解や誇張に満ちている、と本書は指摘する。本書の目的は、そうした「小説やミュージカルによって誤解の広まったシャムの『王様』の実像に迫り、この『王様』の思想に決定的な影響を与えた『もうひとりの私』と『王様』との長い交友のあとをたどり、それが、どのようにして『王様』の世界観に革命的变化をもたらしたかをたずねる」という3点にある（p. 10）。

2部構成で、前半が石井米雄による「もうひとつの『王様と私』」、後半が飯島明子による「解説 王様の国の内と外—19世紀中葉のシャムをめぐる『世界』」である。2010年

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

に急逝した石井米雄の遺稿となった前半に、解説者である飯島明子が丹精な註記を加え、かつ 19 世紀シャムの社会背景について詳細に解説した秀作である。もともと石井が「一般読者が読みやすいよう、註などを排した書物を意図」(p. 193) して執筆していたためか、全体は平易で読みやすく、「王様と私」と対をなす「もうひとつの」物語を読んでいるかのような印象すら受ける。それだけでなく、解説者が随所に書き込んだ註釈の厚みの効果で、タイを良く知る人々の知的好奇心も満たす良書になっている。

本書が扱う人物は、「王様」である現バンコク朝の第 4 代国王モンクットと、「もうひとつの私」であるキリスト教宣教師パルゴア神父である。両者の半生や、宗教を超えた交流の深化の過程について、そしてそれがシャム社会に与えた影響について、膨大な史料を駆使して描き出している。なお、本書は多くの節から構成されており、紙幅の関係上、一覽を記載することができなかった。

石井米雄 もうひとつの「王様と私」

前半は、24 の節からなる。モンクットが西洋の宗教や文化、言葉に関心をもち、学習した一連の流れを、おおよそ時系列に説明している。その大半は、「王様」が「私」と出会う前に培った関心や知識の形成過程についてであり、ミュージカル「王様と私」の中で描かれる「野蛮な東洋」の「王様」イメージに対する丁寧な反証である。その内容を簡単にまとめると、以下のとおりである。

モンクットは、ラーマ 2 世を父に、最高

位の王妃を母として、1804 年に誕生した。14 歳になるとタイ社会の慣例どおり少年僧として、20 歳の時には比丘として再度出家した。しかしその直後、父ラーマ 2 世が急逝し、後継国王は王妃の子であるモンクットだと思われた。しかし、これまで僧院生活しか経験が無いことや、何より西欧列強が東南アジアの国々に次々に進出して植民地化の危機が迫っていたという社会的背景から、16 歳年上の異母兄チェーサダーボディンがラーマ 3 世として王座につくことになった。そのため、モンクットは再び僧院生活に戻ることとなり、その中で培った交友関係や知識が、「シャムの近代化の進展の歴史」(p. 16) に大きな役割を果たすことになった。

比丘となったモンクットが真っ先に行なったのは、民衆の宗教生活を見て回ることであった。そうしてタイ文化における仏教のあり方やパーリ語を学ぶ傍ら、ラテン語の学習を開始する。この時、ラテン語の教師として招かれたのが、「もうひとつの私」であるパルゴア神父であった。

パルゴアは、当時モンクットが出家していた寺院近くの教会に所属しており、タイ語に堪能で、後にタイ語やタイ文化に関する大著を執筆した人物である。モンクットにはラテン語の他、近代科学についての知識も与え、「パルゴアは、モンクットにヨーロッパ先進諸国の文化を伝えた最初の人」となった(p. 32)。また同時に、「タイ文化への謙虚な姿勢」をもち、客観的にそれを理解しようとする人柄で、モンクットが国王になった後も絶大な信頼を寄せた人物である。

モンクットは、キリスト教をよく勉強して理解していたものの、あくまで西洋の文化や近代科学についての窓口として関心を抱いていたにすぎなかった。当時シャムには、パルゴアをはじめとするカトリックの神父の他、プロテスタントであるアメリカ人宣教師も多く居住していた。しかし宣教師らはパルゴアとは異なり、「キリスト教の福音を伝えることのみを急」(p. 54)で、シャムの文化を理解しようとしなかったため、モンクットが全幅の信頼を置くことはなかった。とはいえ、プロテスタント宣教師カズウェルからも英語を学ぶなど、宣教師を完全に排除したわけではなかった。いずれにせよ、モンクットがパルゴアとの親交を深めることができた要因は、両者が互いの宗教を押し付けず、尊重し合ったことにあるといえる。

その後モンクットは、1851年にラーマ3世が病で逝去すると、27年の出家生活を終えて還俗し、同年王位についてラーマ4世となった。即位してすぐに、『官報』を創刊したり、王宮の因習を廃止したり、中国への「朝貢貿易」をやめるなどし、守旧的だったラーマ3世の方針を180度転換した。さらには、1857年までの間に立て続けに3つの修好通商条約を締結し、その影響で旧権力の構造が再編を余儀なくされるなど、シャム国内の状況も大きく変わっていくことになった。

その頃になると、パルゴアは欧米の外交官たちの窓口として、さらにモンクットにとっても欠かせない人物になっていた。モンクットは、「ヨーロッパ人の目に野蛮と映るような慣習は、積極的に廃止させ」たが、そのた

めのヨーロッパ理解はパルゴアをはじめとする、カトリックの神父との交友を通じて培われたものであった(p. 82)。こうした中でモンクットは、自身が西欧の思想に触れたのが成人以降だったことから、より早い時期にヨーロッパの考え方を学ぶ必要があると考え、長子チュラーロンコーンのためにイギリス人家庭教師を雇った。それが、ミュージカル「王様と私」の「私」、アンナ・レオノーウェンスである。

パルゴアとモンクットの友情は28年間にわたったが、1862年にパルゴアはその生涯を閉じた。彼は、「外国人に対しては異例なほどの感謝の念を表明」したモンクットに見送られて旅立った(表紙)。

飯島明子解説 王様の国の内と外—19世紀中葉のシャムをめぐる「世界」

後半の解説部は、16節からなる。前半が、モンクットとパルゴア両者の人物像に焦点を絞って、物語的に叙述していたのに対し、後半は解説の名のとおり、両者の置かれた背景、特にシャムを取り巻く世界情勢について、広い視点から記述している。これにより、両者の行動の意味や、王としてモンクットが置かれた状況がさらに立体的になり、前半を際立たせている。

解説は、モンクットが王に即位した直後に締結した、バウリング条約を起点にすすめられる。「港市国家」として発展してきたシャムは、バウリング条約によって「開国」する以前から対外貿易が経済の基盤をなしてきた。とはいえ、同条約によって貿易の自由化

がもたらされ、既得権益の権力構造が大きく変革した。王室についていえば、その変化は「従来毫も自明ではなかった王室の範囲がまさにこの時代の王たるモンクットによって次第に限定され、秩序立てられるのであり、そうして顕現したモンクット・ファミリーが担うべき王権の正当性が確立されていく過程」として、大変重要な契機となった (p. 96)。

続いて第2節からは、「小国」シャムを取り巻く周辺諸国との関係について説明している。まず、当時のシャムについて理解するうえで不可欠なのは、国の領域が現在の「タイ」と同義ではないという点である。たとえば、シャムの北方にはラーオ人を国王とし、チェンマイを中心とするラーンナー王国があった。一方、現在のビルマ（ミャンマー）方面は、モンクットの即位当時にはすでに、イギリスの侵攻によってその力が弱まりつつあった。

このような状況の中でモンクットは、結果的にシャムとビルマの王朝間の最後の戦争となる、「チェントウン戦争」を仕掛けた。通説では、権力基盤の脆弱であったモンクットが、やむを得ず戦争を起こしたという消極的理由が挙げられる。しかし飯島は、この戦争が「シャムはイギリスと共通の敵と戦っていることを示し、「国際社会に踏み出すシャム王の威信をかけた戦争だった」(p. 125)といえろと指摘し、そのことはモンクットがバウリングに送った「私信」から推測できるとしている。さらに飯島は、モンクットとバウリングが交わした相当数の書簡の内容について、「ここにも『もうひとつの王様と私』があったと言いたくなるほどである」とも述

べている (p. 126)。

第8節からは、西欧との外交関係について話を展開する。「1855年の『バウリング条約』締結はまた、王様の外交の始まりでもあった」(p. 135)とし、イギリスのヴィクトリア女王や、フランスのナポレオン三世から親書を得るためのモンクットの努力と、それが実現した時の喜び様とに言及している。モンクットは、自身の英語を駆使して「アジアの中で『特別』に抜きでた存在」としてシャムの存在を訴え、そう認められることが「さしあたり最上の喜びであった」(p. 137)。

ナポレオン三世から親書を受け取ったモンクットであったが、その後のフランスとの関係は困難であった。それは、第11節と第12節に記述されている、カンボジアの領有権をめぐる混乱に始まった。

飯島は、フランスとの間で起こった問題には、モンクット自身というよりも、実務官僚たちの指示や動向が影響を及ぼした可能性もあるとしている。まず最初の軋轢は、フランス使節がカンボジアへ向かう際のスパイ行為が原因で生じたが、このスパイ行為はおそらく、当時モンクットとともに対西欧外交で活躍していた、王弟ウォンサーティラートサニット親王の指示であり、モンクットの関与については不明確だと指摘する。また、フランスがベトナムを植民地化した後、シャムがカンボジアに対する宗主権を完全に失うまでの両者間の関係の変遷についても、欧米使節から事実上の宰相とみなされたシースリヤウォンの台頭に注目する見方もあることから、モンクットの意向の反映ではなかった可

能性があるとしている。13節では、こうしたフランスとの関係悪化を受け、モンクットが抱いたであろう、ナポレオン三世への複雑な胸中について述べている。

続く14節では、これまで登場した西欧諸国の外交官たちに加え、アメリカやプロイセンの使節団などに言及し、「東洋」全体での動向の中にシャムを位置づけている。そして彼らの動きを、「西洋世界のアジア進出の一環を担い、西洋の支配する秩序による普遍化に向かって足並みを揃え」た動きであったとし(p. 176)、こうした西欧の価値観に対する、モンクットの深い絶望ともいうべき考え方に、最後の節で言及している。モンクットは、西洋人が自分たちを同じ「人間」としてではなく「動物」としてしかみておらず、そうした考えはキリスト教に起因すると考えていた。パルゴア神父と「深い友情」を涵養し、ローマ法王を『人間界の全人類』に慈愛を注ぐ「最大最高の博愛主義者」と呼びながらも、モンクットにとって『キリスト教文明』は、容易に太刀打ちできない『敵』であった」(p. 186)。

そして、彼は自身の知識を、キリスト教徒である西洋人と比肩しうるものであるとアピールすべく行なった皆既日食の観測旅行の際にマラリアにかかってこの世を去ることになった。

批評

以上、本書の概略を述べてきた。これまで、モンクット（ラーマ4世）とその当時の社会背景について、本書ほど多岐にわたっ

た観点から述べられたものは、管見の限りみられない。タイ史の研究ではラーマ5世以降に焦点があたることが多く、ラーマ4世より以前について、特に王たちの「思想」や「世界観」に焦点をあてたものはなかったからである。ミュージカルや小説の「王様と私」をとおして広まった「王様」モンクットのイメージが優先して流布したのは、そうした学術的要因もあるだろう。その意味で本書は、飯島が「あとがき」で書いたように「後学の方たちへの架け橋」として(p. 194)、当該期を理解するための必読書になっていくことは間違いない。

それだけでなく、現代タイの政治を研究する者にとっても、本書はタイにおける「国王観」を理解する一助となる。ラーマ4世は、官僚や朝貢国王たちと直接文書をやり取りするための宸筆と上奏文を取り入れた人物である[川口 2013]。これは、地方からの上奏文や自身の地方行幸を重視した現国王プーミポン（ラーマ9世）の行動や、それを通じた政治的影響力の拡大という点にも共通点があり、興味深い。

あえて本書に注文をつけるならば、次の点を挙げたい。国王が西欧との関係を構築する過程を描いた本書の目的からはずれてしまうが、モンクットの側近たちに関する言及があれば、より「王様」モンクットの人物像の記述に厚みが出たのではないだろうか。たとえば本書には、カンボジア問題について、側近ともいうべきシースリヤウォンら重要人物に関する指摘がある。そうした側近らとモンクットの関係がより描かれれば、宮中で「王

様」が置かれた立場について、また「王様」を取り巻く周辺の人物たちの世界観について明確になり、モンクットの先見性が際立ったのではないかと考える。ただ、タイの歴史研究では、いずれの時代についても、側近たちや国王のブレンとなった人物たちへの言及が少なく、これはタイの歴史や政治、王制研究全般にいえる課題であるかもしれない。

上記の課題を含めても本書が良作であるといえる最大の理由は、前半と後半が絶妙なバランスで構成されている点にある。前半と後半は、それぞれモンクットの生涯の「陽」と「陰」とを描き出しており、それを通じてモンクットが如何に困難な時代を乗り越えたかがよくわかる構図になっているからである。

本書はもともと一冊の本として構成されたものではなく、前半は急逝した石井による未完成の原稿であり、「典拠が全く示されていなかった」うえ、「典拠として参考しうる、まとまった資料はとうとう見つからない」状況だったという (p.194)。その石井の原稿をそのままの形で残し、かつ全体の流れを損なわないような註釈を付け加えるという作業が、相当な労力を要したであろうことは、想像に難くない。

石井の文章は、あくまでも『王様と私』への反証であるためか、モンクットについてやや楽観的に記述されている。モンクットがパルゴアら友人をとおして西洋と「出会い」、友人との交流によって西洋への理解を深めていく様子が良くわかるものの、そこにあるモンクットの「王様」としての苦悩はあまり伝わってこない。一方、後半の飯島の解説から

は、シヤムの置かれた状況に視野を広げること、で、「王様」としてのモンクットが、西洋に対して最後まで深い絶望ともいうべき感覚をもっていたことへ言及している。

こうした見方の違いは、両者が焦点をあてている時期が異なるからだとも見えるかもしれない。前半は、モンクットが産まれてからパルゴアが死去するまで、後半は、モンクットが王として即位してから死去するまでが対象だからである。しかし、パルゴアが逝去した6年後にモンクットもこの世を去っていることから、本書の前後半はほぼ同時期について記述しているといえる。そのため、パルゴアの死後、モンクットが西欧への絶望に突然悩まされるようになったとは考えにくい。つまり、本書が描いているモンクットの「陽」と「陰」は、まさに、分析対象がひとつ（一人）であっても、書き手の視点や切り取り方によって大きく異なる歴史観が描けることを示しているといえよう。そうした実践を一冊の本にまとめたという点で、本書は歴史記述の新しい挑戦だといえる。

モンクットは、西欧諸国の国王たちに多くの親書をしたため、その内容は西欧に対して常にへりくだった姿勢を保っていた。これは、シヤムを守るうえでは賢明な判断だったかもしれないが、「東洋の野蛮な」国の国王として自身を描いたのは、誰よりもモンクット自身だったかもしれないとすら思わせる。その考えに至る時、タイで『王様と私』が不敬罪であるとして上映禁止になっている理由がわかるような気がする。

前半を「王様と私」の裏にあるもうひとつ

の物語として、後半を当時のシャムを理解する歴史研究として、そして一冊を歴史記述の挑戦として、専門家だけでなく、広く一般の人々にも読んで頂きたい。

引 用 文 献

川口洋史. 2013. 『文書史料が語る近世末期タイ—ラタナコーシン朝前期の行政文書と政治』
風響社.